

海野福寿, 権丙卓著 『恨: 朝鮮人軍夫の沖縄戦』 (書評)

著者	鶴園 裕
雑誌名	歴史評論 = Rekishi hyoron
巻	460
ページ	106-109
発行年	1988-08-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/43878

海野福寿・権丙卓著『恨——朝鮮人軍夫の沖繩戦』

鶴園 裕

海野先生へ
手紙の形で書評をすかかってをお許しく
さい。

太平洋戦争が明治政権の初発から有して
たアジアに対する侵略主義の総決算であり、
なかんずく一九三一年の「満州事変」を契機
とした中国侵略の総破綻の結果であったとい
う家永三郎さんの名著『太平洋戦争』(一九六
八年)に代表されるような、いわば歴史学の
常識というようなものが意図的にも無意識的
にも忘れられようとしている今日、このよう
な日本の風潮に対して危機感を感じているの
は、何も私だけではないでしょう。八三年の
教科書問題を始めとし、侵略される側の責任

をうんぬんして文部大臣はやめさせられたも
の、その後も意軒軒昂で『文芸春秋』など
の一部マスコミから賞をもらった自民党代議
士、また今年の靖国神社の春季例大祭では日
本の「国体や国柄」をうんぬんし「占領軍の
亡霊」からの脱却を説いて国を守るための慰
霊行為の正当性を主張した奥野長官発言(八
八・四・二二)など枚挙にいとまがありません。
そこに見られるのはまぎれもない悪しき
日本ナショナリズムの復活、大国意識のあら
われでしょう。そればかりではありません。
太平洋戦争が、米・英との帝国主義戦争であ
った以前に、そもそもアジアに対する侵略戦
争であったという平明な事実を忘れてしま
うと、相対的には、進歩的な側からも妙な発言
があらわれます。山口昌男・猪瀬直樹氏の対
談『ミカドと世紀末』(一九八七年)における

猪瀬氏の「あの太平洋戦争で結果的にアジア
の彼らの植民地をみんな独立させちゃったん
だから」(第六章、「心のなかのミカド」、一八
二頁)以下の対話は、西欧に対して日本を限
りなく特殊化させる論法で、結果的には日本
帝国主義擁護になっています。「ゆきゆきて
神軍」の映画批評の部分(第七章)などでは天
皇制の無責任の構造などがしっかりとらえ
られているだけに(そもそも映画の主題がそ
の問題でしたが)天皇制国家をストレンジ
ジャー・異人論でやっている文化人類学の怪しさ
が浮き上がっている印象でした。総じて国際
日本文化研究センターでのレヴィ・ストロー
スの講演など、日本文化礼讃論をやってもら
って日本人自身はまたどのような自画像を描
き出そうとしているのでしょうか。主観的で
自己陶酔的な自画像を描くのは勝手ですが、
近隣諸民族にとっては受け入れがたいものに
違いありません。

昨年の夏、本書をお送り頂いた時、最初は
何かの間違ひではないかと思つたものです。
「恨」というカバリーの大きな文字と『サラダ
記念日』で有名な文芸書の出版社・歴史関係

の本もたくさん出版していることは後に知り
ましたが、「朝鮮人軍夫の沖繩戦」という副
題を見、海野先生のお名前を発見しようや
く以前お話にうかがった本だということに気
づきました。しかも読み進む程に大きなショ
ックに近い感動を受けました。これまで朝鮮
史研究者や日本史研究者がどうしても越せな
かったアポリアや死角というようなものが、
いとも乗々とのりこえられているように思え
たからです。私は何人かの友人にも本書を推
薦し、また『歴史評論』の編集部が私に書評
を依頼した際もためらうことなくお引き受け
しました。

しかし、編集部への依頼は、主として戦争体
験の意味をどのように伝えるのかという意図
からでしょう。その意味では、本書の原書で
ある『ケラマ列島』権丙卓、一九八二年、朝
鮮語、以下原書と略しますを)お送り頂いた
ことは大変参考になりました。やはり、権丙
卓さんの聞き書きが中心となった原書と主と
して海野先生の手が加わったと思われる本書
には歴史意識や民族的な感性の違いと思われ
るようなものでも感じることがあったから

です。そこには簡単には解決することのでき
なかつたいくつもの問題があったのではない
かと推察しています。にもかかわらず、原書
の単なる翻訳としてではなく手が加えられた
共著として日本語で出版されたことの意味を
私は高く評価しています。以下、歴史におけ
る追悼の意味や戦争体験の継承の問題などを
原書と本書に即しながら考えていきたいと思
います。

二

共著の書名の『恨』には恐らく歴史における追悼の意味が深くこめられているのでし
うね。「恨」の意味論に関しては滝沢秀樹さ
んにすぐれた論文(怨と恨―民衆史の方法に
関連して)『歴史学研究』一九八七年一月)
がありますからそれに譲るとしても、やはり
日本語の「恨」は文字どおり「恨み」、「怨恨」
などのルサンチマンの意味あいが強、「恨」
と書いて朝鮮語読みの「ハン」とふられても
私には本書の書名としてはなにか違和感が残
ったことも事実です。滝沢秀樹さんの言う

「韓国語の『恨』(ハン)」が持っている単な
るルサンチマンや「うらみ節」を越えたいわ
ば歴史形成を指向する精神としての意味、従
ってその実践としての『恨』を解くこと(ハ
ンプリ)の意味」を認め、海野先生のおっし
やる「民族の屈辱的な歴史も『恨』であれば、
個人の不幸な境遇も『恨』である。人びとは
これらの『恨』を解くためにしぶとく努力す
る。諦めることのない恨嘆のメンタリテー
ーが朝鮮民族の生命力を培っている」(本書「ま
えがき」―海野執筆)という共通の認識、朝鮮
語の「恨」のもつ積極的な歴史形成力を認める
がゆえに、いきなり「輸入概念」を表題に使
うことへの危惧を感じたのです。その点では
むしろ『沖繩タイムス』の「軍夫の御霊に誓
う」(八七年五月五日、七日)や雑誌『世界』
の同年八月号に書かれた「慰霊の旅」の表題
の方が日本人には分かりやすいでしょう。こ
れらの文章を拝見すると、先生の歴史学は単
なる机の上の歴史学ではなく、まさに行動す
る歴史学なのだということを実感させられま
す。

一一月には沖繩に慰霊の旅に出、翌年の四

月には韓国の慶尚郡に慰靈碑を建立するといふ行為を通して歴史における追悼や鎮魂の意味を深く考えられたのだろうと存じます。これは失礼な言い方かも知れませんが、五〇歳を越して朝鮮語の手習いを始められた時にこのような共著を出されることを予想されていたでしょうか。その意味では韓国に留学され、権丙卓さんに会われて原書に出会い、しやにむに日本への紹介を志すという海野先生のバイタリティを支えたものは何だったのでしょうか。

三

先生は「まえがき」で次のように書かれていますね。「太平洋戦争史関係書のどれをひもといても、落丁のように朝鮮軍人・軍属の記述は欠落している。」また別の一節では「私たちは、占領地域のアジア民衆のいまだ消えていない戦争の傷跡の追尋とともに、直接銃を取らされたり、戦場へかり出された旧植民地民衆の戦争体験に耳を傾け、植民地・占領地民衆の苦悩と被害の実態を通じて太平洋戦

争史の総体をとらえ、アジア民衆と共有する歴史認識を深めたいと思う。歴史家としてのこのようなやむにやまれぬ思いが日本への原書の紹介の動機にはあったのだろうと思います。またさらにその前提には「戦後世代の人びとにとって、侵略も戦争も生まれるはるか昔のことである。半世紀も前に父祖が行った暴虐の歴史に対し、同じ民族の一員として贖罪感をもつことよりも、いまのいま、日韓関係や日本国内において現実存在している民族差別や做見に対して責任を負うべきだ、という意見もあるだろう。まさにそうである。私たちは、いまのいまの問題のためにやらねばならぬこと、やり切っていないことにもどかしさや負い目を感じている」という日本人としての責務感があり、「償おうとして償い切れぬあやまちではあるけれど、その歴史に立ち返らなければ民衆の深い信頼にもとづくこの国との友好関係を樹立することは不可能だろう。道は遠い」（いづれも「まえがき」から）という日本側の歴史認識の（欠落意識の欠如）現状へのいらだちとそれと同じぐらゐの相互の「民衆の深い信頼」にもとづく友好への強い

願望があるのだろうと思います。確かに原書には不思議な魅力があります。海野先生が「まえがき」でお書きになっている「被害者であるはずの沖繩県民が、『日本人としての沖繩県民』として植民地民衆に対しては加害者の立場にあつたこと」という深刻な問題も原書には私の読み取りの限りまったく表われず、それどころか千沢基氏の証言では住民が生きるために隠匿した食料を盗みだしたことに対する罪の意識が見られるし（原書一七九頁、本書三〇一頁）、沈在彦氏の証言には生きる能力という点での日本人にたいする民族的な優越感すら窺えます（原書一九五頁、本書二一五頁）。死の美学に酔い、あるいは死の哲学を叩き込まれていた日本人と「恨」を抱えても生きぬくことを哲学としていた当時の朝鮮人とは当然のことかも知れませんが、総じて深刻な体験にもかかわらず、原書全体に感じられるニューモアや余裕、日本人をみる際の「ゆるしとやさしさ」の視線はどこからくるのでしょうか。

「アジア民衆と共有する歴史認識」という願望はわかりますし、そこにこそ共著の意味が

あるのだと思いますが、一方、両者にはまだ深い溝があることもまた事実だろうと思います。

四

書評として許された余白は残り少なくなつてしまいました。原書では前書きに続く冒頭部分に置かれた「慶山の春」の流言蜚語の部分(本書では第二章)は私には大変衝撃的でした。

宮田節子さんの労作『朝鮮民衆と「皇民化」政策』(一九八五年)の第一論文「朝鮮民衆の日中戦争観」は民衆の流言蜚語を抵抗の言語として捉えたものでしたが、「慶山の春」では官憲が民衆の抵抗意識を「引っ掛ける」ものとして流言蜚語を利用していた状況が描かれていたからです。主として官憲資料による宮田さんの論文が流言蜚語を「抵抗」としてとらえ、聞き書きによつた原書が流言蜚語を官憲の挑発としてとらえたことは、ある意味では事柄の二面性を示しただけのことなかも知れませんが、民衆史にかかわる微妙な

問題を提起しているように思えました。また「一〇〇円の誘惑」の章(共著第三章)では狭義の強制連行が始まる以前の一九四〇年代の初めにおいても、梶村秀樹さんが「一九二〇〜三〇年代朝鮮農民渡日の背景」(『在日朝鮮人史研究』六号、一九八〇年)で一農村の社会学の調査資料を利用して示したような「気力ある」青年像がすつきりとした形で示されていました。

その他にも原書には聞き書きを利用したもののならではの臨場感のある記述が随所にみられます。本書でもほぼそれらの聞き書きの部分は生かされているようでした。ただその点で残念なのは、原書にみられたアモルファスな北海道の土木現場における平岡という棒頭に対するアイヌ人差別意識や、炭鉱をやめる際の松本という日本人青年との「連帯意識」などが本書ではカットされている点です。

せつかくの聞き書きを利用した民衆意識の世界を捨てたような気がします。全体として、本書では、原書には見られない日本側資料の追加や、かなりの客観資料の入れ換えで聞き書きによる思いこみの訂正や事実の再把握

握が行なわれ、歴史叙述としてはすつきりとしたものになっていますが、半面、海野先生の加筆部分と原書が本来持っている「民衆世界」的な部分との不整合がみられなくはありませんでした。とはいえ、わずか一年の韓国留学で語学的な困難をのりこえ「アジア民衆と共有する歴史認識を深めたい」との一念からこれ程の成果を上げられた先生の行動力とその歴史学以後学の一人として深く学びたいと思っています。今後の一層のご活躍とご健康をお祈りいたします。

一九八八年五月三日を前に日本国憲法の理念が在日韓国・朝鮮籍の人々にも及ぼされることを願いつつ。

敬具

(河出書房新社、一九八七年、一六〇〇円)

* * *